

ともし。



地域の方が毎日グラウンドゴルフの練習をしている。持留グラウンド。その中で練習を人一倍楽しみにしている方がいます。

—— 下西昭三さん(64歳)は、幼い頃から知的障がいと向き合っていました。練習に通うようになってから、自ら話をするようになりました。

あまり話をしない

母親のナミエさんが異変に気付いたのは、昭三さんが小学校に入学する頃。「あまり話をしない。昭三は他の子と比べて、成長が遅いのではないか」。当時は情報がほとんどなく、どこに相談をして良いかもわかりませんでした。4年生の頃、担任の先生から「末吉町に障害児支援施設が新しくできたから、入所させてはどうか」と話があり、「本人にとって良いのであれば」と15歳で卒業するまで住み込みで入所しました。卒業当時は働けるところがなく、ナミエさんが経営する下西石油店でドラム缶の片付けなどを手伝いながら暮らしていました。

広がる輪

昨年の12月、大崎町身体障害者連絡協議会主催の町身障協グラウンドゴルフ大会に、同会で持留地区を取

りまとめる方から誘われ、参加。初めてスティックを握りました。とても楽しそうにプレーをする昭三さんを見て、ナミエさんは「グラウンドゴルフをさせたい」と思いました。

下西さん親子が住む持留では、地域の方が毎日、持留グラウンドにグラウンドゴルフの練習に集まり、ナミエさんも以前から参加していました。—— 近くにグラウンドがあるから昭三にも練習させたいけど障がいがあるからみんなに迷惑をかけるれない—— ナミエさんは、練習仲間に、1人で練習をさせたいから旗を貸してもらえないか相談をしました。すると、みんなから「1人でしないで、みんなでしたほうが良いがね!連れてきてよ!!」と歓迎の声。一緒に練習をするようになりました。



昭三さんとナミエさん